

冬のよもぎの緑よりなほ切実に生きしとおもふは悲しみに似る

真鍋美恵子『蜜糖』 1964年

若き母なほ生きをりてその子ふたり一椀の粥奪ひあらそふ

竹山広『とこしへの川』 1981年

細き蛇に生きよ生きよと言ひきかす生きて年々このみどり見よ

佐佐木由幾『半窓の淡月』 1989年

生きることは手を伸ばすこと幼子の指がプーさんの鼻をつかめり

俵万智『プーさんの鼻』 2005年

あめつちのあはひ生きつぐたらちねの母は必須の字余りのごと

玉井慶子『黙約の譜』 2008年

樫の実のひとりに生まれ死にてゆくことを肯ふにんげんなれば

本田一弘『あらがね』 2018年

### 【死別】

紅雀皆死なせたり生けるもの飼はまくは悲し皆死なせたり

川田順『伎芸天』 1918年

わが妻とちつと眼をみあはせぬこの吾子も亦今死なんとす

木下利玄『紅玉』 1919年

そこに少しの日蔭をつくれひるがほよ花は汚れて骨埋められる

斎藤史『魚歌』 1940年

呼べと呼べど遠山彦のかそかなる声はこたへて人かへりこず

佐佐木信綱『山と水と』 1951年

亡き子来て袖ひるがへしこぐとおもふ 月白き夜の庭のブランコ

五島美代子『いのちありけり』 1961年

ゆりかごの歌うたおうか生涯にたった一人のわが子の通夜

住正代『赤い蠟燭』 1990年

野良一世ひたむきなりき亡骸へ春のひかりが拍手してゐる

斎藤佐知子『帰雲』 2011年

### 【死の諸相】

死にかへりひびきを絶えしうしほ波うねりにうねりまなかひにあり

新井洸『微明』 1916年

死ね死ねといふ不思議なるあざけりの声が夕べはどこからかする

前川佐美雄『植物祭』 1930年